

画像診断（ヘリカルCT）

動 向

CT検診も綴りだしてから10数年になる真の検診は、全CT検査の約10%だった。

X線検査からの、CT検査は通常はX線検査により、なんらかの変化を見て、それ以上を明らかにする検査とされている。最近は直接CTも場合によっては、あるようだ。

検診機関では、精検は、機関内のX線検診からの精検と、外部の医療機関からの精検がある。これらグループは、両者ともその母集団が不明で各種疾患を発見率など算出しても、その発見率は無意味である。また、両者の集団が判明したとしても、集団全体の一部は、他機関で精検を受け、その把握は不可能に近い。

個々の例を論ずるのは検診の範疇に入らないので現在は省いている。興味ある症例に遭遇すれば、その都度なんらかの形で、報告に努めている。

最近、話題となっているじん肺検診は、負荷の掛かった集団とみるべきで、現在までの受診例は、別に分析して報告し、依頼者にも返している。さらに、厚生労働省研究の村田班（滋賀医大教授）よりじん肺の画像研究資料（従来の撮影方式スクリーンフィルムシステムと、新しいデジタルシステムとの対比研究）として、依頼され、必要事項を報告した。

また環境省による、横浜市内、鶴見区居住者の、アスベスト曝露サーベイは、本年までのまとめでは、鶴見駅近傍にあった、アスベスト工場周辺の住民に、この曝露の所見“プラーク”を、認めた対象者が追って、環境省より公表があらう。

この原稿修正数日前、NCI（National Cancer Institute、(米国国立癌研究所) から、Radiology（米国医学放射線関係雑誌）に発表した論文に関する記事があった。それは、数年前からの研究で、NLS T（National Lung Screening Trial米肺癌検診臨床試験）によって施行していたものだ。内容は、肺癌検診において、胸部低線量ヘリカルCTによる検診が、胸部X線検診による、肺癌死亡率を対比していた。その結果、低線量ヘリカルCTによる検診で、20%死亡率が低下した。対象集団は、55～74歳のヘ

ビースモーカー、53,000人以上で、ランダム試験であるとのことだった。

日本でも、厚生省研究で低線量ヘリカルCTによる肺癌検診が試みられており、現在までのところ、生存率では全検査、約80%（協会での96年－09年の低線量胸部CT検診の集計67例でも約80%の生存率であった。）で、従来1－2期の成績に匹敵している。最終目標の、コホート研究による死亡率算定は、なお進行中である。この検診には、当協会も研究当初から参画しており、毎年の研究班長（大阪成人病センター中山）に報告している。その一部は、その都度、胸部CT検診学会、放射線医学関係、がん検診学会、協会研究欄等に発表した。

2009年のCT総受診数は、ACCがんをなくす会（会員制）169例、Dock（人間Dock受診者中CT胸部検診希望者）1017例、LCS（CTによる肺癌検診希望者）460例であった。この中から肺がん2例が発見された。発見率は2／1,646、121.5／10万、標準化発見比は0.54であった。この値は、通常のX線検診と大差は無かった。しかし、うち1例はX線でチェック可能例だった。真のCT発見は1例。

神奈川県では、がん対策が数年前から開始され各種の目標が設定された。そして、今回の対策の優れた点はその効果を見届けようと言うところが過去の対策とは少々異なっている。それは、EBM（Evidence Based Medicine）が叫ばれているさなかを意識してか、苦勞の一端がうかがわれた。その対策は、それぞれ別々に、効果の判定が要求されるので各部門はなにかと気を配ったあとがみうけられる。

行政上、成果の判定には指標の選択も課題となる。設定から期限を区切って判定を算出するようになっていたようだ。

CT室でもなにか出来ないかと模索し、数年前からCTでなら画像上少しは納得のいくような肺内の変化を示せる。この手法は、また京都の熱心なCT検診グループがCTを説明しながら禁煙を指導したと報告があった。挑戦したのでその予報を別項で報告する。

関係の集計表は114頁に掲載